

論文

## 戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題 日本語教科書に見る「国家」、「国民」、「言語」、「文化」

Problematic continuity over the postwar period in an ideological realm of Japanese language teaching : contents analysis of “State”, “Nation”, “Language” and “Culture” in textbooks.

田中 里奈\*

概要

本稿は、日本語教科書を対象に通時的に内容分析を行い、戦後の日本語教育における、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関する教育内容の変遷を明らかにしたものである。その結果、4つの時期区分から成る教育内容の変遷が得られた。しかし、同時に、個々の記述の質的分析により、そうした教育内容の「変化」の根底には、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関して、個々の中身を固定化し、その外側の「括り」を絶対化する思想的「連続性」が存在していることも明らかとなった。今後はその表面的な「変化」は何によってもたらされ、また、その根底にある思想的「連続性」は何によって維持されているのかを明らかにしていく必要がある。

キーワード：教育内容、内容分析、「括り」、日本語教科書、思想的「連続性」

### 1 問題の所在と研究目的

戦後の日本語教育は、「国際交流の促進や学術文化振興」(川瀬, 2001, p.51)や「経済協力・文化交流」(関, 1990, p.5)のための日本語教育ということばで語られることが多い。そこでは、終戦を軸にした政策上の目的の「転換」が大きくクローズアップされ、戦前と戦後の日本語教育との間には大きな断絶があることが前提とされている。しかし、一方の日本語教育周辺部からは、日本語教育における戦前と戦後の「連続性」を指摘する声が高まっている(川村, 1994; 田中, 1989; 西川, 2002)。それらは、近代国家を形成する過程で、「日本」、「日本人」、「日本精神」と強固に結びつけながら創出させてき

た「国語」が、今日においても、そのような「結びつき」を前提としたまま教育されているという批判である。

しかし、こうした批判の最大の欠点は、「国語」という概念が形成された過程を根拠に、今日の日本語教育も批判するというスタイルにあり、今日の日本語教育のどのような教育内容を対象にしているのかが明確ではなく、抽象的な議論に留まっているという点である。戦前の言語政策や日本語教育、また、戦後の言語政策における「国語」や「日本語」の扱われ方は明らかにされているが、戦後の日本語教育の実情は具体的には調査されておらず、戦後60年間における「変化」も十分には取り上げられていない。「日本語」の来歴をもとに今日の日本語教育も批判の対象とされるならば、「日本語」を扱わざるをえない日本語教育はどこまでいってもそうした批

\* TANAKA Rina (釜慶大学校日語日文学部;  
t\_riina0917@hotmail.com)

判から逃れられないことになる。しかし、今必要なのは、そうした批判を視野に入れながら、新たな教育の方向性を模索していくことではないか。そのためには、まず、イデオロギー批判の際に持ち出される「国家」、「国民」、「言語」、「文化」がいかに扱われてきたかを、戦後の日本語教育における具体的な文脈の中で明らかにし、問題点を整理していくことが必要だと考える。

しかしながら、日本語教育関係者による研究は、依然として、文法や語彙などの言語形式やその習得に焦点をあてたものが多く、この点における日本語教育の側からの検討も十分とはいえない。確かに、近年、教科書の内容に着目した研究（柴崎、1999；他）も行われ始めたが、ニーズと教科書とのずれや情報の偏りを指摘するに留まり、教科書で扱われる教育内容に介在するイデオロギーには着目されていない。

また、教育内容の変遷を戦後から現在までの通時的な視点から分析した研究も数が限られている。細川（2002）は、日本語教育における「言語」と「文化」の捉え方が、「伝統・遺産の価値」、「社会における人間の行動・思考様式」、学習者自身による「個の認識体系」へと変遷してきたことを指摘しているが、「国家」や「国民」に関する考察は行っていない。また、雑誌『日本語教育』における「日本人」、「日本語」、「日本的思考様式」に着目して内容分析を行った牲川（2004a, 2004b）は、「思考と言語の関連づけの論理展開」を明らかにしているが、分析対象が1962～80年の論考に限られているため、現在までの全貌は明らかにしていない。

そこで、本研究では、イデオロギー批判の際に持ち出される「国家」、「国民」、「言語」、「文化」が、戦後の日本語教育において、いかに捉えられ、提示されてきたかという変遷を、日本語教科書の系譜と内容分析から明らかにし、問題点を指摘する。「連続性」とは、瞬時に形成されるものではなく、時間をかけて醸成されるものである。したがって、今日の日本語教育を作り上げてきたプロセスこそを検討する必要があるため、本稿では、戦後から2002年までを対象に通時的な視点から教育内容の考察を試

みる。

## 2 研究方法

### 2.1 分析対象

本研究においては、日本語教科書を分析対象とした。その主な理由は以下の2点である。

第1に、抽象的に批判されてきた戦後の日本語教育の実情を明らかにするには、教育内容として「国家」、「国民」、「言語」、「文化」がいかに学習者に対して投げかけられているのかを具体的な文脈で明らかにしていく作業が必要だからである。教育研究者による論考も教科書と同様、またはそれ以上に思想や理念が明確に描写されうるが、研究者の意識にのぼっていないことや報告する上ではじめから回避されてしまったことは話題として取り上げられない可能性も考えられるため、教科書を分析対象とする。

第2に、1で述べたように、戦後の日本語教科書を対象にした研究はあっても、語彙や文型レベルに留まっており、提示している教育内容を対象にした研究、とりわけ「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関して論じた研究は少なく、依然として未開の状況にあるからである。

以上の理由から日本語教科書を対象とするが、それらをさらに絞り込んでいくために一定の基準を設けることにした。分析対象を無作為に抽出するのは、広く使用されてきた教科書が必ずしも分析対象にならない可能性があるからである。本研究では、日本語教育においてある程度の影響力をもった教科書こそを対象にする必要があるため、社会的な基準を設けて対象を選定することに関して述べた日吉（2004）を参照し、以下の(A),(B)の基準により選定を行った。

(A) 1945～1993年発行の教科書の選定基準 教科書を網羅したリストや論文である、①河原崎・吉川・吉岡（1983）、②河原崎・吉川・吉岡（1992）、③関（1994）、④新内（1994）、⑤凡人社（2004）における「総合型教科書」および「読解教材」リストの①～⑤のうち、3つ以上に掲載された教科書

(B) 1994～2003年発行の教科書の選定基準<sup>\*1</sup> ⑤を満たし、かつ、⑥清(2003)において公表された凡人社の日本語教育機関売上(1990年3月～2003年1月)の上位8位に入った教科書、または、⑦凡人社(麹町店)の店頭売上上位30位(2001年4月～2004年2月)の書籍の売上数を合計し、総合型または読解用教科書として上位20位に入った教科書以上の(A),(B)の基準により選定された41シリーズ、合計101冊の日本語教科書(付表1参照)を本稿の分析対象とした<sup>\*2</sup>。

## 2.2 分析方法

本研究では、Krippendorff(1989)などを参照し、「データをもとにそこから(それが組み込まれた)文脈に対して反復可能(Replicable)かつ妥当な(Valid)推論を行うための一つの調査技法」(Krippendorff, 1989, p.21)とされる内容分析の手法を用いた。この手法は、教科書や雑誌、新聞記事などを対象に、分析対象の素材にどのようなイデオロギーが介在しているかを明らかにできるとされており、本研究の目的と合致しているからである。

しかしながら、日本語教科書は、内容分析が比較よく用いられる社会科の教科書の場合とは異なり、課を分析単位として採用することは困難である。なぜなら、読解素材や文型説明など、質の異なる素材が混在しており、また、話題的に関連性のない素材が同じ文型を用いることから1つの課に組み

込まれていることが多いからである。そのため、分析単位を、読解文、および、会話文とし、独立した練習問題や例文などは対象から除外した。さらに、外国語学習教材という性質上、同じ内容でありながら、仮名の文、ローマ字の文などの形態が異なる文章が提示される場合があるが、ダブルカウントは行わなかった。

具体的なコード化の手順は、まずはじめに、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」<sup>\*3</sup>の4者が取り上げられている箇所を上記の分析単位をもとにすべて抜き出し、次に、抜き出したものを4者の出現の仕方に注目しながらカテゴリーに分類していった。そのカテゴリーは以下の1～5である。

1. 「日本語は日本人が話すことばである」といったように、4者のいずれかを結びつけた形で記述しているもの(付表2(b)列)
2. 「日本人は～である」といったようにある画一的な知識・情報と4者を結びつけた形で個別に記述しているもの(付表2(c)列)
3. 2.の提示後、「あなたの国ではどうですか?」などを切り口に、教室活動において学習者同士に4者に関する比較を促しているもの(付表2(d)列)
4. 2.や3.のようなあるイメージを伴った個別の記述は一切載せないものの、教室活動において、学習者間でそれぞれの属するとされる「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関する比較を促しているもの(付表2(e)列)
5. 1.～4.のように、4者に関してある固定化した画一的な知識・情報を取り上げることに対して否定的な見解を提示しているもの(付表2(g)列)

なお、分析の精度を維持するために、本研究では、教科書の使い方によっては異なる展開が考えられる場合であっても、どのように提示されているかとい

<sup>\*1</sup> (A)に従うと、①～④の文献には掲載されていない1994年以降の教科書が分析から除外されてしまうため、⑥、⑦のように売上上位にランクインしたものを分析対象とした。1994年以降、河原崎他(1983)のような代表的な教科書を網羅し紹介するような文献が見当たらないため、この方法を採用した。

<sup>\*2</sup> 教科書番号は、1つのシリーズの中で一番早くに出版された教科書を基準に4桁の数字を割り振ったものである。ハイフンの後の番号はそのシリーズの中での出版年順を示す。また、基準(A)(B)に従うと、Alfonso, A. (1966). *Japanese Language Pattern*.、村野良子(1996).『絵でマスターにほんご基本文型85』、富阪容子(1997).『なめらか日本語会話』も分析対象に含まれるが、この3冊には短文による文型提示や挿し絵などしか掲載されておらず、分析単位としてカウントしうる文章が見当たらないため、分析対象から除外した。また、選定基準を設けたことで1960年代初頭までの教科書の種類はかなり限られてしまったが、今後は、それらを網羅的に分析していく必要がある。

<sup>\*3</sup> 筆者の立場とは異なるが、教科書における「文化」という語彙のほとんどは、ある集団の「思考・行動様式」と同義語で用いられているため、便宜上本稿においても「文化」と呼ぶ。

教科書番号 0001-1 : 14-16	教科書番号 0018-1 : 26-29
<p>あなたがたはこのがっこうのせいとです。</p> <p>あなたがたはこのがっこうでっぽんごをならいます。わたくしはあなたがたのせんせいとです。あなたがたにっぽんごをおしえます。あなたがたはにっぽんごがわかりますか。</p> <p>はい、わかります。</p> <p>よくわかりますか。</p> <p>いいえ、まだよくわかりません。</p>	<p>あなたがたはこの学校のせいとです。この学校では日本語をおしえます。日本語は日本のくにのことばです。日本は「にほん」ともいいます。どちらもつかいます。あなたがたはこの学校で日本語をならいます。わたくしはこの学校のきょうしです。あなたがたに日本語をおしえます。あなたがたはわたくしから日本語をならいます。あなたはもう日本語がわかりますか。</p> <p>いいえ、まだよくわかりません。</p> <p>日本語はむずかしいですか。</p> <p>はい。わたくしにはむずかしいです。</p> <p>なぜですか。</p> <p>わたくしは日本人じゃありませんから。</p>

表1 『改訂標準日本語読本』・『長沼現代日本語』での「日本・日本語・日本人」の結びつき

う4者の出現の仕方のみに着目して分類を行った。

### 3 分析結果

以上の手順でコード化を行ったところ、分析単位(付表2(a)列)が合計3064抽出された。付表2は、分類された1~5.を時系列に並べた分析結果である。

以下では、上記の分類をもとに得られた時期区分の特徴を指摘する。なお、[ ]内に教科書番号、( )内に該当頁を提示する。

#### 3.1 第1期(戦後~1962年):「画一的な知識・情報」のみの提示

戦後から1962年までは、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関する教育内容は、「画一的な知識・情報」として提示される。例えば、[0003-6]では、「日本人と話していると、やたらと相づちをうったり、せかせかと落ち着かないが、それは四季の変化がめまぐるしくて、年中着物の出し入れに、追いつてられているから・・・(略)。(153-154)」という本文によって、「日本人」の固定化した記述が提示されている。このような傾向は、続く第2~4期においても散見されるが、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」は「画一的な知識・情報」としてのみ提示されていた点がこの時期の特徴である。

#### 3.2 第2期(1963~1980年):「結びつき」の提示

1963年になると、4者のいずれかの「結びつき」を提示する教科書が出現するようになる。その様子が最も顕著に現れているのが、戦前の『標準日本語読本』(1931~34年)に改訂を加えた『改訂標準日本語読本』[0001-1~5](1950~51年)、『(再訂)標準日本語読本』(1964~66年)、『長沼現代日本語』[0018-1~3](1983年)、『長沼新現代日本語』(1988~92年)から成る「長沼シリーズ」である。1950年に出版された[0001]では、日本の国土、季節、経済などをテーマに4者を個別に描写しているが、「結びつき」自体には言及していない。しかし、改訂後の[0018]では、「結びつき」の思想を提示する方向へと大きく転換していく。

表1の抜粋では、まず、「日本語」と「日本」との結びつきが提示され、また、「日本語」が難しい理由として、「日本人ではないこと」をあげている。つまり、「日本」、「日本語」、「日本人」の「結びつき」を教科書作成者が自明のものと捉えていたことが読み取れる。同様のことは、[0001-2]24課、[0018-3]14課、[0018-7]6課の改訂にも見られる。[0001-1]から[0018-3]に改訂される過程で、「日本語を通して、文化ってというか、日本人の考え方の基本がいくらかわかってきたような気がするけど」(96-97)という文章が付け加えられ、「日本語」と「日本人」、さらに「日本人の考え方」までもが結び

ついたものとして提示されるようになる。このように、日本語教育界において長く使用されている同シリーズにおいて、1960年代と1980年代の内容に大きな変化が見られることは記憶に留めておく必要がある。なぜなら、転換期として考えられる1970年代には、他の教科書においても「結びつき」に言及する記述が頻出するようになるからである。

その70年代の転換を前に、逸早く「結びつき」に言及した[0002-1]では、留学生の視点から日常生活を綴るという設定のもと、「早く日本人の様に日本語が話せる様になりたいです。」(261)という表現が提示される。このように、「日本人」のような発音で日本語を話すことに対して「上手」「正確」と価値付ける方向性は、[0007-1](98)、[0015-1](188)などでも散見される。また、[0012-1]では、「日本語を勉強したおかげで、日本人の考えかたが少しわかるようになってきたんじゃないかと思います。」(394)という本文が提示され、「日本語」の話者を「日本人」に限定する思想が存在していたことがうかがえる。

以上のように、1960年代初頭より徐々に4者の「結びつき」は提示され始め、1973~77年にそのピークを迎えた\*4。それらの記述は「結びつき」を提示するだけであり、学習者に習得を強要していないものの、「言語」を「国家」「国民」「文化」と「結びついたもの」として学習することに何らかの利点があることが学習者の視点に立って綴られているものが多く見られた。

### 3.3 第3期(1981~1989年):「差異の比較・発見」の要求

1981年になると、学習者の発話を促すために、教科書で提示されている本文をもとに、学習者間で話し合うことをタスクとする内容が取り入れられる。

例えば、[0020-2]では、「日本社会の家族的構成ということがよく言われる。これには、社会全体、あるいはその中の種々の集団を運命共同体として家族になぞらえて考える場合と・・・(略)」という文章の最後に、「あなたの国の集団の中で家族になぞらえて考えることのできるものがあつたら、例をあげて説明しなさい。」、「あなたの国で、友人関係を血縁関係に擬して考えることがあれば、例をあげて説明しなさい。」(1-2)などのタスクが用意されている。同様のことは、日本の贈答習慣に関する本文の後に、「あなたの国では、どんな時にどんな物をあげますか」と問う[0022-2]25課においても確認される。

この時期の教科書には、先ほど取り上げた[0018]のように、「国家」「国民」「言語」「文化」の「結びつき」を提示するパターンのもも載せられているが、差異を比較・発見させて、学習者の発話を促そうとする手法が取り入れられるようになった点は、1980年代の教科書がそれ以前のものとは大きく異なっている点である。これは、1970年代から始まったコミュニケーション・アプローチの影響により、教室活動におけるコミュニケーション中心主義が主流となり、学習者の発話を増やすことに重点が置かれたため、こうした「比較・発見」の手法が取り入れられたのだと考えられる。

### 3.4 第4期(1990年以降):「差異の比較・発見」の要求と画一的な知識・情報の否定

1990年代に入ると、本文では、特定の「国家」「国民」「言語」「文化」の「画一的な知識・情報」は取り上げないものの、4者を軸に、学習者に差異を発見させ、ディスカッションにおいて他の学習者と比較させることに主眼を置いた教科書が出現する。例えば、[0031-1]21課では、世界的な環境問題を扱った読解文の後に、「あなたの国では、環境破壊の影響はどんなところに現れていますか。」という問いを提示し、出身国に関する情報を提供させようとしている。同様に、17課では血液型に関する読解文の後に、「あなたの国は何型の人が多いですか。」という問いが、[0033-1]9課においては、サルと人間の視力の違いに関する読解文の後に、なぜ

\*4 この点に関連して、『日本語教育』における「思考様式言説」の分析を行った牲川(2004b)では、「言語」と「文化」の関連づけが1973年頃から出現し、1975年にそのピークを迎え、それ以降は関連づけが自明化し、1980年になると出現しなくなったと指摘している。また、牲川(2004a)では、その関連づけには、日本語と日本人の思考様式とが一貫性の欠いた論理のすり替えが存在していることを明らかにしている。

教科書番号 0018-2 : 109	教科書番号 0018-6 : 159
<p>一郎：毎日、練習の後で、先輩のユニフォームを洗わせられたり、部室のそうじをさせられたり…。</p> <p>チン：どうしてそんなことをしなくてはいけないんですか。</p> <p>一郎：ううん、そうですね…。日本人は先輩、後輩のような上下関係をととても大切だと考えているんです。だから、クラブの中でも先輩が後輩にいろいろなことをさせる習慣があるんだと思いますよ。</p>	<p>鈴木：毎日、練習の後で、先輩のユニフォームを洗わせられたり、部室のそうじをさせられたり…。</p> <p>チン：へえ、新生は大変なんですね。</p> <p>鈴木：でも、楽しいこともありますよ。クラブに入ると、日本人の友達もたくさんできるし…。</p>

表2 「画一的な知識・情報」が削除される方向への改訂

か、「みなさんの国の視力検査について教えてください。」という問いが投げかけられる。つまり、この時期の教科書においては、ある特定の「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関する「画一的な知識・情報」を取り上げられないものの、そのテーマに関して、学習者の「国家」、「国民」、「言語」、「文化」をもとに比較させ、むしろ、学習者の側から「画一的な知識・情報」を提供させる活動が多くなるのである。ここでは、比較によって見出された相違点を述べることに重点が置かれ、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」は、新たに、学習者の発話を促すための「装置」となる。発話内容は学習者に任せられ、事前に授業担当者が把握できないことから考えると、比較する際の内容はいかなる情報・知識でもよく、発話させること自体に重点が置かれているといえる。

また、この時期のもう一つの特徴は、「画一的な知識・情報」を提示することに否定的な姿勢が示される点である。例えば、表2のように、1983年の[0018-2]と1991年の[0018-6]を比較した際に、「画一的な知識・情報」が削除される方向に改訂されたことが読み取れる。

この他にも、[0025-1](101)では、「西洋人は夜の食事は暗いのが好きなのさ。」という会話文に対して、「でも、日本は明るいのが好き、欧米人は暗いのが好きってきめてしまうのには問題があるんじゃないかしら。」と、画一的な国民性の提示に否定的な態度が示される。

さらに、「画一的な知識・情報」の提示を否定することをテーマとする[0022-4],[0033-2],[0039-1]

などの教科書も出現する。例えば、[0039-1]では、「ステレオタイプへの挑戦 イメージの日本・日本人」というテーマを掲げ、教科書1冊を通して、固定的な日本・日本人像からの脱却を図ることが目指されている。そこでは、まず初めに、既存の日本・日本人像を意識化させ、次に日本・日本人に関する様々な文章を読み、最後に、新たに得たイメージを発表させる活動が想定されており、新たなイメージを与えることで学習者がもつ既存のステレオタイプの幅をいかに広げるといいう点が注目されている。

確かに、第1～3期で見られた特徴は、第4期においても引き継がれる。しかし、「画一的な知識・情報」を教科書には提示せずに学習者から引き出そうとする活動や、多様なステレオタイプ像を提供しようとする試みから考えると、「画一的な知識・情報」を教科書を通じて提示することに対する否定的な思想は存在し始めたといえる。

#### 4 教育内容の「変化」の中の「連続性」

3で提示したように、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関する教育内容は、今日では短絡的に「結びつき」を明示する記述は出現せず、時代とともに緩やかに「変化」を遂げている。しかし、実際には、そうした「変化」の根底にはある一定の「連続性」が隠されているのではないだろうか。

酒井(1996)は、「国民」、「言語」、「文化」が「国家」と規定関係があるものとして捉えられた場合、「国民」、「言語」、「文化」は、他の「国民」、「言語」、「文化」と常に排他的な関係に陥り、同時に、「国

民」、「言語」、「文化」のそれぞれの中身の同一性を約束し、固定化させると指摘をしている。この点を踏まえ、「結びつき」を前提とする思想を考えると、何かと何かを結びつける段階において、それぞれの「括り」を固定化させるという問題が潜んでいることに気づく。第2期を中心に、4者の「結びつき」は提示されたが、「結びつける」という思想の根底には、個々の「括り」を強固に捉える思想が存在しているといえるのである。

このことは、第3,4期に出現した学習者同士に差異を比較・発見させるという教室活動においてもあてはまる。何かと何かを比較・対照させることは、その対象をある一定のレベルで固定化させ、その周辺部の「括り」の存在を、体験を伴った形で学習者に想定させる。つまり、「あなたの国では...?」という問いによって、学習者を、ステレオタイプ像を引き出す対象としてだけでなく、ステレオタイプ像の根底にある「括り」の自明性を体現する存在に位置づけてしまうことになるのである。確かに、「あなたの国では...?」と問うことそれ自体がそのまま「括り」に結びつくわけではなく、また、様々な教科書の使用方法も考えられうるが、そうした問いをもとに学習者側から出された話題を扱うことを想定した教科書が存在するという事実は、教室という場において、学習者が所属するとされる「国家」、「国民」、「言語」、「文化」といったある集団という「括り」の存在を前提にした教育実践が行われてきたことを示している。

また、第4期には「画一的な知識・情報」の提示を否定する教科書が出現したが、そこでも、「括り」というものは自明のものとして扱われていた。先程の「西洋人は暗いのが好き」という「画一的な知識・情報」の提示を否定する教科書[0025-1]においては、その後、「だれか文化人類学者にでも聞いてみないと、はっきりしたことは言えないね。」(101)という本文が示されるが、ここでは「括り」自体を問題化したというよりも、ある集団を括って述べた内容が妥当かどうかを素人には決めることはできないと指摘しているに過ぎない。

要するに、「画一的な知識・情報」を提示すること

を否定し、「括った」中身を画一的に語るのではなく、内部の多様性に目を向けるべきであるという考えが強まってきているものの、その場合にもやはりあらかじめ「括り」は想定されており、その存在を扱うこと自体は常に自明視されてきたのである。学習者同士で「画一的な知識・情報」を引き出し合うことや、教科書作成者の切り取った「知識・情報」を提供してきた流れは、そのことを物語っている。以上のように、「国家」同士、「国民」同士、「言語」同士、「文化」同士の「差異」を前提にした言語教育は、それらを相対化する思考を促し、「括り」を内在化させる方向に進んできたのである。

## 5 結論と今後の課題

日本語教科書の内容分析により、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」に関する教育内容は、1962年までは「画一的な知識・情報」、1963～80年は「結びついたもの」、1981～89年は「差異を比較・発見するもの」、1990年以降は新たに「画一的な知識・情報の否定」の対象として扱われるようになったことが明らかになった。今日では、戦前のような「結びつき」を前面に出す教科書はほとんどなく、教育内容は時代とともに緩やかに「変化」を遂げている。しかし、その表面的な「変化」の根底には、それぞれの「括り」を強固に意識化させる思想が脈々と流れていることが明らかとなった。つまり、日本語教育には、教育内容の表面的な「変化」の根底に、「括り」を絶対化する思想的「連続性」が存在しているのである。

現実の世界では、一般に、ある「国家」、ある「国民」、ある「言語」、ある「文化」は、他の「国家」、他の「国民」、他の「言語」、他の「文化」とは個別に存在していると認識されている。それは、今日までに形成されてきた認識体系でもある。戦前に活躍した国語学者の言説を分析したイ(1996)は「国語」を「はじめから存在している事物ではなく、近代国家に適合する言語規範をもとめる意志が作りだした価値対象」(p.93)であると指摘し、巧妙な論理のすり替えによって構築されてきた過程を明らかにしている。これは、Anderson(1991 白石他訳 1997)

の「国民」は「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体」(p.24)であるという指摘をより具体的な文脈で示したものと見える。このように、「国家」、「国民」、「言語」、「文化」というものが政策に依拠する形で人為的に創出されたものならば、言語教育において「括り」を前提とした活動には検討の余地がある。「括り」の存在は、「括った」内部にある一定の均一性を想定させると同時に、「括り」の内部に入り切れないものを排除の対象としうる。そして、「括り」を設けることで、容易に序列化された構造を作り出し、その頂点に「正統なもの」という「虚構」を構築する。言語教育という文脈において「括り」を自明のものとして取り上げることは、そうした思想が日本語の学習に持ち込まれた時、学習者に、その「虚構」を追い求めることを暗に要求するのではないか。そして、それは「括り」を想定した上での表層的な「知識・情報」の交換に学習を組織しやすくし、学習者個人のもつ価値観が教育内容として扱われにくい構造を作り出すと考えられる。しかし、言語教育が自らを語るためのことばの教育ならば、言語と思考が連鎖したやりとりの中で、それまでの経験や認識体系から形作られた個人の価値観をも再考しながら、既成概念を抱え込むだけではない表現主体を育成する場へと変革していく必要があると考える。そうした方向性を模索していくことで、言語教育が政策上の利便性などに学習者を巻き込むだけのものではない、新たな教育の方向性を切り開くことができるのではないだろうか。

今後は、本稿で明らかとなった教育内容の表面的な「変化」は何によってもたらされ、その根底にある思想的「連続性」は何によって維持されているのかを明らかにするため、教育内容に影響を与えている言語政策、特に、学習者の政策における位置づけの変化や、言語教育と言語政策の関わりに着目して教育内容におけるイデオロギーを明らかにするとともに、個人の価値観が再構築され続ける活動としての日本語教育実践を模索していきたい。

## 文献

- イ ヨンスク(1996).『「国語」という思想 近代日本の言語認識』岩波書店.
- 川村湊(1994).『海を渡った日本語 植民地の「国語」の時間』青土社.
- 川瀬生郎(2001).『日本語教育序説』近代文芸社.
- 河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸(1983).『教科書解題』北星堂書店.
- 河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸(1992).『日本語教材概説』北星堂書店.
- 清ルミ(2003).コミュニケーション能力育成の視座から既存教科書文例と教師の“刷り込み”を問う 「ないでください」を例として『日本語教育学会秋季大会予稿集』155-157.
- 酒井直樹(1996).『死産される日本語・日本人』新曜社.
- 柴崎秀子(1999).日本語教科書における「日本」の表象『創価大学別科紀要』13, 42-55.
- 新内康子(1994).日本語教科書の系譜(第四期) 日本語教育発展・膨張期の教科書『鹿児島女子大学研究紀要』16(1), 19-43.
- 牝川波都季(2004a).日本語教育における言語と思考 その意味づけの変遷と問題点『横浜国立大学留学生センター紀要』11, 61-85.
- 牝川波都季(2004b).日本語教育学における「思考様式言説」の変遷『日本語教育』121, 14-23.
- 関 正昭(1990).『日本語教育史』愛知教育大学日本語教育コース.
- 関 正昭(1994).日本語教科書の系譜(第三期) 戦後、日本語教育復興期の教科書『鹿児島女子大学研究紀要』16(1), 1-17.
- 田中克彦(1989).『国家語をこえて 国際化のなかの日本語』筑摩書房.
- 西川長夫(2002).『戦争の世紀を越えて グローバル化時代の国家・歴史・民族』平凡社.
- 日吉昭彦(2004).内容分析研究の展開『マス・コミュニケーション研究』64, 5-23.
- 細川英雄(2002).『日本語教育は何をめざすか 言語文化活動の理論と実践』明石書店.

凡人社(編)(2004). 『日本語教材リスト No.33  
2003~2004』凡人社.

Anderson, B. (1991). *Imagined Communities:  
Reflections on the Origin and Spread of Na-  
tionalism* (rev. ed.). London: Verso Books.  
(アンダーソン, V., 白石さや・白石隆(訳)  
(1997). 『増補 想像の共同体 ナショナリ  
ズムの起源と流行』NTT出版.)

Krippendorff, K. (1980). *Content Analysis: An  
Introduction to Methodology*. London: Sage  
Publication. (クリッペンドルフ, K., 三上俊  
治・椎野信雄・橋元良明(訳)(1989). 『メッ  
セージ分析の技法 「内容分析」への招待』  
勁草書房.)

付表1 分析対象教科書

付表2 分析結果

出版年	番号	教科書名	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	1988	0019-3	A Course in Modern Japanese 3	18	1	5	0	0	0	1
1950	0001-1	標準日本語読本一	80	0	5	0	0	0	0	1989	0023-2	Communication Japanese Style2	30	0	9	0	0	0	0
1950	0001-2	標準日本語読本二	30	0	5	0	0	0	0	1989	0023-3	Communication Japanese Style3	30	0	20	0	0	0	0
1950	0001-3	標準日本語読本三	25	0	7	0	0	0	0	1989	0025-1	総合日本語中級前期	24	0	16	0	0	0	0
1950	0001-4	標準日本語読本四	20	0	7	0	0	0	0	1989	0026-1	中級日本語読本練習 日本語 ろい ろい 1	12	0	6	0	0	0	0
1951	0001-5	標準日本語読本五	20	0	7	0	0	0	0	1990	0010-3	新日本語の基礎I	37	0	0	0	0	0	0
1963	0002-1	Modern Japanese for University Student Part 1	80	2	9	0	0	0	0	1990	0016-3	日本語中級I	27	0	2	2	2	0	0
1966	0002-2	Modern Japanese for University Student Part 2	36	1	12	0	0	0	0	1990	0019-4	A Course in Modern Japanese 4	18	1	4	0	0	0	0
1967	0003-1	外国学生用日本語教科書 初級	40	0	2	0	0	0	0	1990	0023-4	Communication Japanese Style4	22	0	7	0	0	0	0
1967	0003-2	外国学生用日本語教科書 中級I	13	1	6	0	0	0	0	1990	0025-2	総合日本語中級	24	0	16	0	0	0	0
1967	0003-3	外国学生用日本語教科書 中級II	30	0	17	0	0	0	0	1990	0025-3	総合日本語初級から中級へ	25	0	23	0	0	0	0
1967	0003-4	外国学生用日本語教科書 中級III	24	0	14	0	0	0	0	1990	0027-1	初級日本語	38	0	9	0	0	0	0
1967	0004-1	Basic Japanese: intensive course for speaking and reading 1	42	0	15	0	0	0	0	1990	0027-2	中級日本語	25	0	9	8	5	3	0
1967	0004-2	Basic Japanese: intensive course for speaking and reading 2	50	0	39	0	0	0	0	1990	0027-3	上級日本語	12	0	2	0	0	0	1
1968	0002-3	Modern Japanese for University Student Part 3	23	0	8	0	0	0	0	1991	0014-1	日本語初級I	33	0	3	0	0	0	0
1970	0006-1	Intensive Course in Japanese (Elementary Course) 1	20	0	0	0	0	0	0	1991	0018-6	長沼祥規 現代日本語III	18	0	8	0	0	0	0
1971	0005-1	Integrated Spoken Japanese 1	12	0	9	0	0	0	0	1991	0026-2	中級日本語読本練習 日本語 ろい ろい 2	14	0	9	0	0	0	0
1971	0005-2	Integrated Spoken Japanese 2	12	0	3	0	0	0	0	1991	0028-1	日本語中級読本入門	31	0	6	14	13	1	0
1971	0006-2	Intensive Course in Japanese (Elementary Course) 2	30	0	2	0	0	0	0	1991	0029-1	Situational Functional Japanese 1 NOTE	16	0	3	0	0	0	0
1973	0007-1	How to Use Good Japanese (正しい日本語)	40	1	0	0	0	0	0	1991	0031-1	テーマ別 中級から学ぶ日本語	25	0	4	14	9	5	0
1973	0008-1	Japanese for Today (あがまじい日本語)	57	1	25	0	0	0	0	1991	0032-2	日本語読本 楽しく読本 中級	10	0	2	1	1	0	0
1974	0009-1	日本語(為難者)学習者用初級日本語読本	41	1	1	0	0	0	0	1992	0014-2	日本語初級II	31	0	2	0	0	0	0
1974	0010-1	日本語の基礎I (のろめいじまじり初級)	27	0	1	0	0	0	0	1992	0018-7	長沼祥規 現代日本語IV	10	1	7	0	0	0	0
1976	0011-1	Japanese for Beginners (日本語入門)	30	2	2	0	0	0	0	1992	0028-2	日本語中級読本練習	22	0	5	10	6	4	0
1977	0012-1	An Introduction to Modern Japanese	60	1	9	0	0	0	0	1992	0029-2	Situational Functional Japanese 2 NOTE	16	0	0	0	0	0	0
1977	0013-1	日本語I	36	0	3	0	0	0	0	1992	0029-3	Situational Functional Japanese 3 NOTE	16	0	3	0	0	0	0
1979	0014-3	日本語中級I	15	0	5	0	0	0	0	1993	0010-4	新日本語の基礎II	38	0	8	0	0	0	0
1980	0006-3	Intensive Course in Japanese (Intermediate Course)	30	0	27	0	0	0	0	1993	0032-3	日本語読本 楽しく読本 中上級	11	0	0	2	1	1	0
1981	0010-2	日本語の基礎II (のろめいじまじり初級)	31	0	3	0	0	0	0	1994	0022-3	文化中級日本語I	22	0	5	1	1	0	1
1981	0015-1	現代日本語	30	1	1	0	0	0	0	1994	0022-4	文化中級日本語II	16	1	7	1	1	0	1
1981	0016-1	日本語初歩I	21	0	0	3	2	1	0	1994	0030-1	An Integrated Approach to Intermediate Japanese	47	0	36	0	0	0	0
1981	0016-2	日本語初歩II	13	0	1	0	0	0	0	1994	0031-2	テーマ別 上級で学ぶ日本語	15	0	4	2	2	0	1
1983	0013-2	日本語II	25	0	15	0	0	0	0	1995	0033-1	日本語中級301-基礎から中級へ	10	0	3	4	2	2	0
1983	0017-1	中国からの帰国者のための生活日本語I	48	0	16	0	0	0	0	1996	0016-4	日本語中級II	14	0	4	4	3	1	0
1983	0018-1	長沼祥規 現代日本語I	80	1	2	0	0	0	0	1996	0032-1	日本語読本 楽しく読本 初中級	7	0	1	4	3	1	0
1983	0018-2	長沼祥規 現代日本語II	30	0	9	0	0	0	0	1997	0035-1	中上級者のための速読の日本語	30	0	18	0	0	0	0
1983	0018-3	長沼祥規 現代日本語III	21	1	18	0	0	0	0	1998	0034-1	生きと暮らすで学ぶ中級から上級への日本語	23	0	7	10	7	3	0
1983	0019-1	A Course in Modern Japanese 1	12	0	0	0	0	0	0	1998	0036-1	みんなの日本語 初級1	43	0	3	0	0	0	0
1983	0019-2	A Course in Modern Japanese 2	12	0	5	0	0	0	0	1998	0036-2	みんなの日本語 初級2	50	0	10	0	0	0	0
1983	0020-1	日本語読本 現代文型中級I	111	0	19	1	1	0	0	1999	0033-2	日本語中級501-中級から上級へ	20	0	3	2	1	1	2
1983	0020-2	日本語読本 現代文型中級II	107	0	20	4	4	0	0	1999	0037-1	実力日本語(上)	42	0	8	0	0	0	0
1985	0017-2	中国からの帰国者のための生活日本語 II	18	0	7	0	0	0	0	1999	0038-1	初級日本語 りんき1	24	0	2	0	0	0	0
1985	0021-1	日本語(みんなの日本語)	70	3	15	1	1	0	0	1999	0038-2	初級日本語 りんき2	24	0	7	0	0	0	0
1987	0021-1	文化初級日本語I	18	0	1	0	0	0	0	2000	0010-5	新日本語の中級	35	1	2	9	6	3	0
1987	0022-2	文化初級日本語II	23	0	3	2	2	0	0	2000	0022-5	新文化初級日本語 I	18	0	2	0	0	0	0
1987	0023-1	Communication Japanese Style 1	68	0	9	0	0	0	0	2000	0022-6	新文化初級日本語 II	21	0	4	0	0	0	0
1987	0024-1	Basic Functional Japanese	35	0	11	0	0	0	0	2000	0037-2	実力日本語(下)	45	0	11	0	0	0	0
1988	0003-5	外国学生用日本語教科書 上級I	30	0	11	0	0	0	0	2001	0039-1	中上級日本語読本 日本への招待	51	0	0	46	45	1	2
1988	0003-6	外国学生用日本語教科書 上級II	25	1	9	0	0	0	0	2002	0040-1	U.Bridge	24	0	2	7	6	1	0
1988	0018-4	長沼祥規 現代日本語I	26	0	1	0	0	0	0	2002	0041-1	ニューアプローズ 中級日本語 基礎編	32	0	5	1	0	1	0
1988	0018-5	長沼祥規 現代日本語II	20	0	0	0	0	0	0	2002	0041-2	ニューアプローズ 中上級日本語 完成編	21	0	2	7	4	3	0